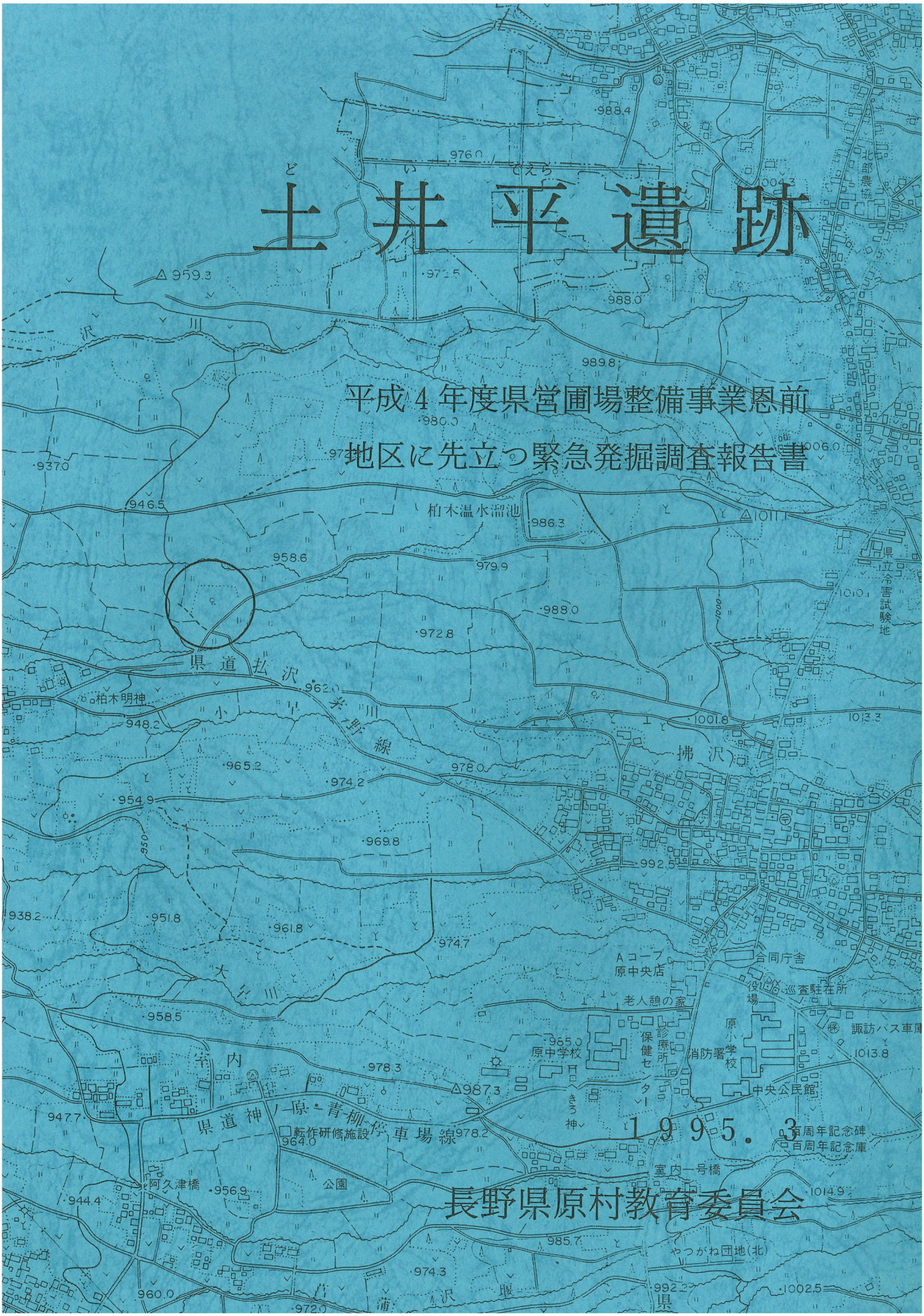
土井平遺跡

平成4年度県営圃場整備事業恩前
地区に先立つ緊急発掘調査報告書



1995.3

長野県原村教育委員会

土井平（どいでえら）遺跡

平成４年度県営圃場整備事業恩前
地区に先立つ緊急発掘調査報告書

表紙地図10,000分の1 ○印が土井平遺跡

序

このたび平成4年度の土井平遺跡発掘調査報告書を刊行することとなりました。

発掘調査は、「平成4年度県営圃場整備事業恩前地区」に先立ち、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から補助金交付をうけた原村教育委員会が実施したものであります。

土井平遺跡は、工事中に新しく発見された遺跡であります。工事の進行上多大な問題点もあったことと思いますが、関係各位の理解と御協力により、失われていく貴重な文化遺産を記録に残すことができました。

こうした発掘を行うたびに、私どもは、現在私たちが居住し毎日生活を営んでいるこの原村の地で千数百年の昔、厳しい自然環境とたたかいながら、文化を創造した先人の姿を想像し、感動を覚えるとともに、そのすばらしい足跡を学べることに大きな喜びを感ずるものであります。

このたびの発掘にあたり、諏訪地方事務所土地改良課の方々の御配慮、長野県教育委員会の御指導ならびに発掘にかかわる多くの皆様の御協力に深甚なる謝意を表する次第であります。

また、発掘報告書刊行にいたる過程において、お世話いただいた関係各位にたいして厚くお礼申しあげます。

平成7年3月

原村教育委員会

教育長　平林　太尾

例　　言

1　本報告は「平成４年度県営圃場整備事業恩前地区」に先立って実施した、長野県諏訪郡原村柏木に所在する土井平遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、諏訪地方事務所の委託と、国庫および県費から発掘調査費補助金交付をうけた原村教育委員会が、平成４年11月19日から12月11日にかけて実施した。整理作業は、平成５年１月４日から７年２月28日まで行なった。

3　遺構・遺物の実測とトレース、写真撮影は平出一治・平林とし美が行なった。

4　執筆は、平出と平林が話合いのもとに行なった。

5　本調査の出土遺物、記録等はすべて原村教育委員会で保管している。
なお、本調査関係の資料には、95の原村遺跡番号を表記した。

発掘調査から報告書作成にわたって、丸山敞一郎・市沢英利・小平和夫・武藤雄六・小林公明・樋口誠司の諸氏に御指導・御助言をいただいた。厚く御礼申し上げる次第である。

目　次

例　　言
目　　次
図版・表目次
I　発掘調査の経過……1
　1　発掘調査に至る経過……1
　2　調　査　組　織……2
　3　発掘調査の経過……3

II　遺跡の位置と自然環境……6

III　調　査　方　法……8
　1　調査区の設定と調査方法……8
　2　土　　層……9
　3　調 査 の 概 要……11

IV　遺 構 と 遺 物……12
　1　平安時代の遺構と遺物……12
　2　時代不詳の遺構……22

V　ま　と　め……23
引用参考文献
報告書抄録

図版・表目次

図版

第１図　原村域の地形断面模式図（宮川――土井平――赤岳ライン）…… 3
第２図　土井平遺跡の位置と付近の遺跡…… 4
第３図　土井平遺跡発掘調査区域図・地形図…… 7
第４図　土井平遺跡グリッド配置図…… 8
第５図　土井平遺跡遺構配置図……10
第６図　土井平遺跡第１号住居址実測図……13
第７図　土井平遺跡第１号住居址出土土器実測図……14
第８図　土井平遺跡第２号住居址実測図……16
第９図　土井平遺跡第２号住居址出土土器実測図……17
第10図　土井平遺跡第３号住居址実測図……18
第11図　土井平遺跡第４号住居址実測図……20
第12図　土井平遺跡第４号住居址・遺構外出土土器実測図……21
第13図　土井平遺跡小竪穴１実測図……22

表

表１　土井平遺跡と付近の遺跡一覧…… 5
表２　土井平遺跡遺構一覧……10
表３　報告書抄録……31

Ⅰ　発掘調査の経過

1　発掘調査に至る経過

農村地域はどこでも同じであろうが、後継者がいないことから高齢化は進むばかりである。だからと云って労力が少なくなることはなく、機械化を望む声は強くなるばかりである。その機械力を増すためには、まず農地と農道の整備が必要となってしまう。それが原村における圃場整備事業であり、平成3年度に着工された「県営圃場整備事業恩前地区」内には、裏長峰遺跡（原村遺跡番号14）・程久保遺跡（原村遺跡番号15）・恩膳西遺跡（原村遺跡番号23）が所在していることから、その保護について平成2年8月8日に長野県教育委員会文化課、原村役場農林課、原村教育委員会の3者で協議を行なった。

しかし、3遺跡ともその規模および性格などは不明瞭なものばかりで、適切な結論を導き出すことはできなかった。その後も諏訪地方事務所土地改良課・原村役場農林課・地元関係者と協議を重ねる中で、村教育委員会は平成3年11月7・8・19日に県営圃場整備事業予定地内の踏査を実施した。当時は県営圃場整備事業茅野市丸山地区に先立つ長峰遺跡（原村遺跡番号13）の緊急発掘調査を実施していたこともあり、時間的な余裕もなく、調査体制を整えることができないことから表面採集と云う限られた調査を試みた。

満足のいく結果を得ることができないまま、その資料を基に平成3年12月16日に、原村役場および現地で行なわれた長野県教育委員会の「平成4年度農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財保護協議」で協議された。出席者は長野県教育委員会文化課、諏訪地方事務所土地改良課、原村役場農林課、原村教育委員会の4者であった。

協議では、遺跡は現状のまま保存していくのが最も望ましいが、前記したように農業者の強い要望があり「記録保存やむなき」との考えに落ち着き、発掘調査の時期については一日も早い機械化を望む声が強く、平成4年度調査を要望されたが、調査員および作業員が少ないなど調査体制が整わないこともあり、平成4・5年度の2年間にわたって緊急発掘調査を実施し、記録保存をはかる方向で同意をみることができた。

前おきが長くなってしまったが、平成4年度は極めてきつい日程の中で発掘調査を進め、予定した調査期日も残り少なくなった11月に入っても、上居沢尾根遺跡と程久保遺跡の調査が終了しないままであった。そんな折、圃場整備事業地内で基盤工事を行なっていた重機が、11月7日に長野県諏訪郡原村6839番地で埋設されていた須恵器の大甕を発見した。そこは周知されていた遺跡ではなく、新しい遺跡の発見であった。工事関係者と保護について協議を行い一時的に工事を止めてもらい、県教育委員会文化課の指導をうける中で、諏訪地方事務所土地改良課および原村

役場農林課と協議を行なった。

協議では、前記したように上居沢尾根・程久保の両遺跡の発掘調査を行っているという最悪の時期であり、調査体制を整えることができない上に、日程の調整もたたなかったが、工事を長期間休ませることができない状況であり、１日も早く発掘調査を実施し記録保存をはかることで同意をみることができた。

原村教育委員会は、国庫及び県費から発掘調査補助金交付をうけ、また、諏訪地方事務所から緊急発掘調査の委託をうけ、平成４年11月19日から12月11日にわたって緊急発掘調査を実施した。

2　調　査　組　織

土井平遺跡発掘調査団名簿

団　　長　平林太尾（原村教育委員会教育長）

調査担当者　平出一治

調　査　員　伊藤　証　平林とし美

調査参加者　発掘作業　平成４年度　　平林途雄　清水豊一　菊池利光　菊池行雄　小林主税　小林ミサ　篠原文子　藤原智恵子　宮坂とし子　清水米美　清水つるゑ　小平章子　藤森米子

整理作業　平成６年度　　津金喜美子　鎌倉あき子　坂本ちづる　（順不同）

事　務　局　原村教育委員会事務局　平成４年度　　小池平八郎（教育次長　～平成５年１月）　大口美代子（庶務係長）　宮坂道彦　伊藤佳江　伊藤　証　平出一治

平成５年度　　平林今朝二（教育次長）　大口美代子（庶務係長）　宮坂道彦　伊藤佳江　五味一郎（主任）　平出一治　平林とし美

平成６年度　　平林今朝二（教育次長）　大口美代子（庶務係長）　宮坂道彦（主任）　伊藤佳江　五味一郎（文化財係長）　平出一治　平林とし美

3　発掘調査の経過

平成４年11月７日　圃場整備事業地内で基盤工事を行なっていた重機が、原村6839番地で埋設されていた須恵器の大甕を発見した。それは新しい遺跡の発見であり、付近一帯で工事が進んでいないところの踏査を行い、遺跡の範囲確認を試み、灰釉陶器と土師器の破片を発見した。しかし、遺物は少なく範囲を明確にすることはできなかった。

工事関係者に保護についてお願いをする中で、一時的に工事を止めてもらい、

諏訪地方事務所土地改良課および原村役場農林課と保護について協議を行う。周知されていた遺跡ではなく、新遺跡の発見であったこともあり計画外の発掘調査になること、また、事業地区内で上居沢尾根・程久保の両遺跡の発掘調査を進めていたこともあり、調査体制を整えるこができない状況であった。しかし、工事の進行状況から1日も早く発掘調査を実施していくことになる。遺跡の範囲については不明な点も多いが、確認調査を行う時間がないこと、また、調査体制も整えることができないことから、須恵器の大甕を発見した地点を遺跡の中心と考え、踏査で遺物を採集した地点および地形を考慮する中で、遺跡の範囲を想定し重機による表土剝ぎをはじめる。

12日　諏訪地方事務所土地改良課および原村役場農林課と現地で保護について協議を行う。

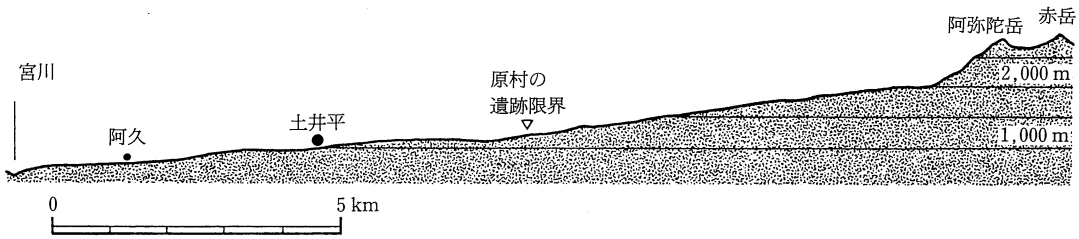
19日　グリッド設定を行い遺構の検出作業をはじめる。1号・2号住居址と小竪穴を検出する。検出写真を撮影した後、小竪穴1の精査を進め、埋土の観察を行う。なお、遺跡東端で検出した住居址を便宜的に「1号住居址」、遺跡発見の切っ掛けとなった須恵器の大甕が埋設されていた住居址を「2号住居址」と呼ぶこととした。

21日　引き続き遺構の検出作業と小竪穴1の精査を行う。1号・2号住居址の精査をはじめる。

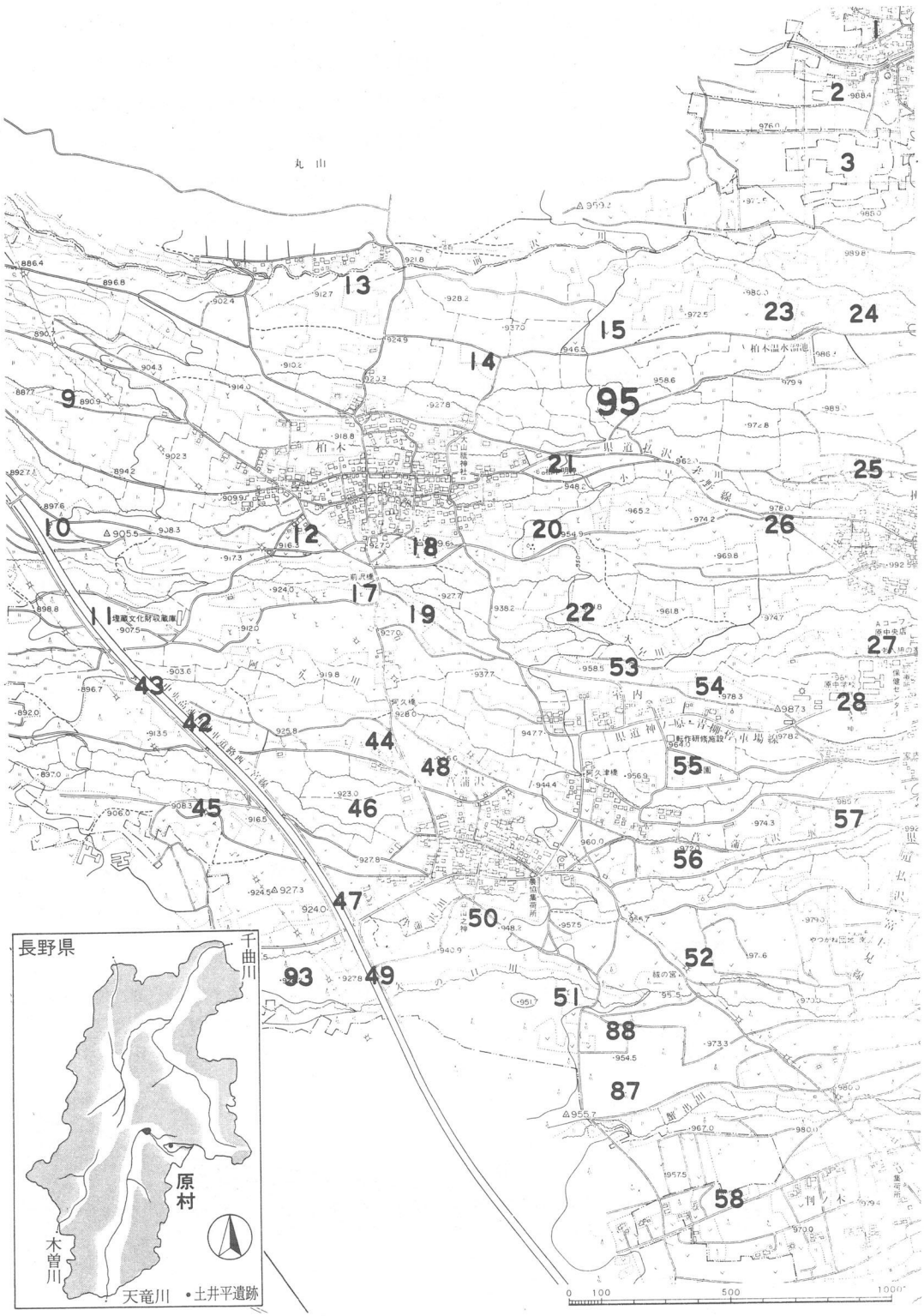
24日　引き続き遺構の検出作業。小竪穴1と1号・2号住居址の精査を行う。小竪穴1を完掘し写真撮影を行う。

25日　引き続き遺構の検出作業を進め、3号・4号住居址の検出写真の撮影を行い精査をはじめる。やはり、1号・2号住居址の精査を進め写真撮影を行う。2号住居址の床面に埋設されている須恵器の大甕の精査をはじめる。遺構の実測をはじめる。

26日　引き続き1号・3号・4号住居址の精査を進め、3号・4号住居址の完掘写真の撮影を行う。



第1図　原村域の地形断面模式図（宮川――土井平遺跡――赤岳ライン）



第2図　土井平遺跡の位置と付近の遺跡（1：20,000）

表１　恩膳西遺跡と付近の遺跡一覧

○は遺物発見　◎は住居址発見

番号	遺跡名	旧石器	縄文						弥生	古墳	奈良	平安	中世	近世	備考
			草	早	前	中	後	晩							
1	家裏	○				◎						◎			昭和59年度発掘調査
2	大久保前											○			昭和54年消滅
3	向尾根	○	○			○									昭和54年度発掘調査
9	比丘尼原					○						○			
10	柏木南	○				◎									昭和50年度発掘調査
11	阿久		○	○	◎	◎	○					◎			昭和50～54・平成５年度発掘調査
12	前沢					◎						○			昭和55・61年度発掘調査
13	長峰			○	○	◎	○		○			◎		○	平成３年発掘調査、消滅
14	裏長峰	○		○		○						◎			平成４年度発掘調査、消滅
15	程久保			○		◎						◎		○	平成４・５年度発掘調査、消滅
17	臼ヶ原			○		○						○			昭和53年度発掘調査
18	前尾根西					○									昭和51年度一部破壊
19	南平					○									
20	前尾根					◎	◎					○		○	昭和44・52～54・59年度発掘調査
21	上居沢尾根					◎	○							○	平成４年度発掘調査
22	清水					○									
23	恩膳西	○				◎	○					◎			昭和62・平５・６年度発掘調査
24	恩膳			○		◎	◎					○			昭和62年度詳細分布調査
25	裏尾根					○									
26	家下					○									昭和59年度発掘調査、平成５年度立会い
27	闢盧沢					○						○			昭和62年度発掘調査
28	宮平					○						○			
42	居沢尾根			○		◎	○					○			昭和50～53・56・平成６年度発掘調査
43	中阿久					○						○			昭和51年度発掘調査
44	原山	○										○			昭和50年一部破壊
45	広原日向	○				○	○					○			昭和58年度発掘調査
46	宿尻	○				◎						◎			平成５・６年度発掘調査、消滅
47	ヲシキ			○	○	○						◎			昭和51年度発掘調査
48	楡の木					○									昭和53年一部破壊
49	大石	○		○	◎	◎	○					◎		○	昭和50・平成４・５年度発掘調査
50	山の神					◎	○					○			昭和54年度発掘調査
51	姥ヶ原					○	◎								昭和63・平成元年度発掘調査
52	水掛平					○						○			
53	雁頭沢					◎						○		○	昭和54・57・63・平成４・５・年度発掘調査
54	宮ノ下			○		○						○	○	○	昭和57・58年度発掘調査
55	中尾根					○	○					○			
56	家前尾根					○						○			昭和51年一部破壊
57	久保地尾根					◎									昭和51年一部破壊、平成６年度発掘調査
58	判の木											○			
87	下原山南			○		◎						○			昭和63・平成元年度発掘調査
93	大石西			○	○							○			平成３年度発掘調査
95	**土井平**											○			平成４年度発掘調査、消滅

27日　引き続き１号住居址の精査を進め、完掘写真の撮影を行う。２号住居址の大甕内に充満する土のカッテングと観察を行う。３号住居址竈内焼土のカッテングと観察も行う。

28日　２号住居址竈内焼土のカッテングと観察を行う。遺構の実測も行う。

12月５日　１号住居址竈内焼土、床面で検出した焼土２個所のカッテングと観察を行う。遺構の実測を行う。

10日　片付けをはじめる。

11日　機材の撤収、水洗いを行ない調査を終了する。

II　遺跡の位置と自然環境

新しく発見した土井平遺跡（原村遺跡番号95）は、柏木区の東方、長野県諏訪郡原村6839番地に位置する。このあたりは八ケ岳西麓に位置し、東西に細長く発達した大小様々な尾根がみられる。その一つである裏沢川と前沢川にはさまれた尾根は、前沢川側に片より、裏沢川側は緩やかな平坦地が広がっている。その平坦地の中には、小高く尾根状に発達したところが数個所みられる。その中の一つが本遺跡で、標高は 955m 前後を計る。

地目は普通畑であるが、以前はりんごを生産していた果樹園であったと聞いている。付近一帯は水田であり、水田の中に取り残された畑地が遺跡であった。地味は、黒土の堆積が薄かった上に、緩やかな南斜面からその南の低地にかけては、数多い礫が散乱していて良くない。遺跡の南外れには礫を拾い集めた結果できた石の山（ヤッカ）もみられた。

遺跡の保存状態は、攪乱が著しく極めて悪かった。果樹園であった頃、肥料を散布するために繰り返し穴や溝を掘ったことにより生じたようである。

この辺りは、当地方において遺跡の密度が極めて高い地域で、第２図と表１に示したように、付近には数多い旧石器時代・縄文時代および平安時代の遺跡が埋蔵されている。なお、原村における遺跡の高度限界は1200m 前後のラインである。

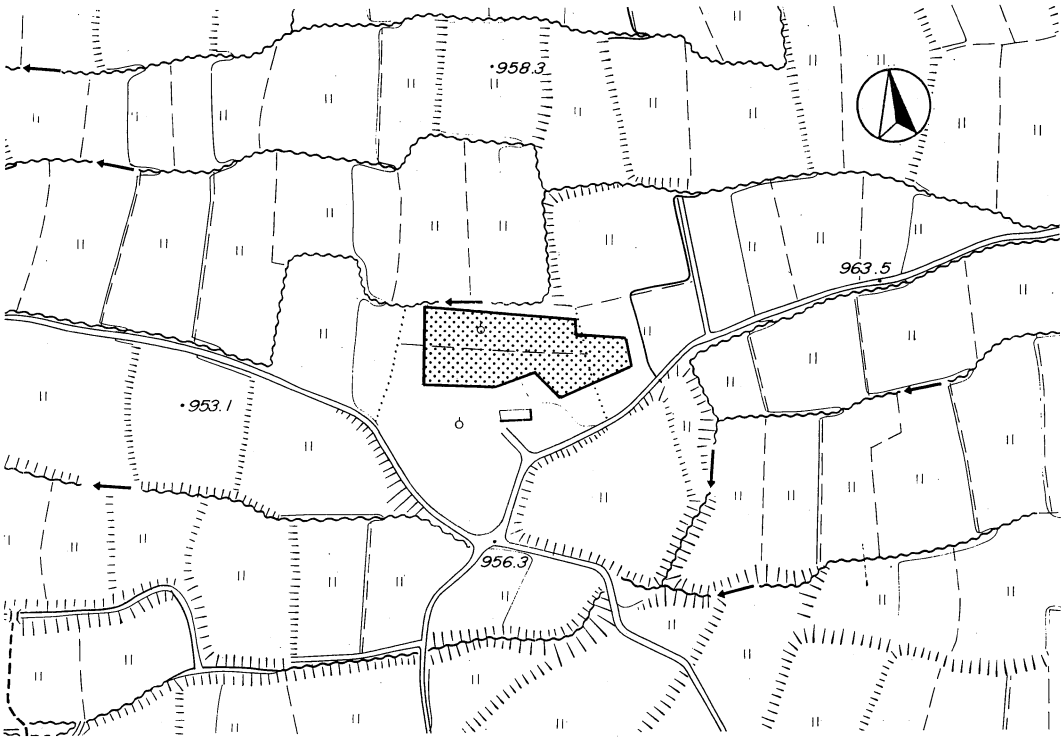
ここでは、本遺跡に関係が深いと思われる平安時代の遺跡に目を向けてみると、平成３年度に県営圃場整備事業丸山地区に先立つ緊急発掘調査で住居址８軒を発見した長峰遺跡（原村遺跡番号13)。やはり、平成４年度に県営圃場整備事業恩前地区に先立つ緊急発掘調査で住居址22軒を発見した裏長峰遺跡（原村遺跡番号14)、平成４・５年度に住居址24軒を発見した程久保遺跡(原村遺跡番号15)、平成５年度に住居址９軒を発見した恩膳西遺跡（原村遺跡番号23）があるし、未だ住居址の発見には接していないが、遺物の発見状況からみて住居址の埋没は容易に考えられる恩膳遺跡（原村遺跡番号24）等が、同じ尾根筋に点在し平安時代の遺跡群を形成している。

また、それらの遺跡は立地する地形を考え、また考慮しなくてはいけないことであるが、長峰

遺跡から裏長峰遺跡までは直線距離にして 400m、裏長峰遺跡から程久保遺跡までがやはり 400m、程久保遺跡から恩膳西遺跡も 400m 位というように、遺跡間の距離は同じである。これは、当時の人たちが集落を営む上において、何等かの意識を示唆しているように思えてくるのは考えすぎであろうか。

これより西方、約 2,000m 先ではホォッサマグナの西縁である糸魚川――静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。

平成 4 年11月に圃場整備の予定地内で新しい遺跡を発見するに至ったが、村教育委員会では平成 3 年11月に予定地内の踏査を行っている。今にして思えば、周知の遺跡範囲にばかりに目がいってしまっていた。そのため本遺跡を発見した地域に足を踏みいれることもないまま調査を終了させ、「未発見遺跡が埋没している」とは一寸も考えなかった。開発に先立って行う範囲確認調査や踏査の重要性と難しさを改めて知ることができた。



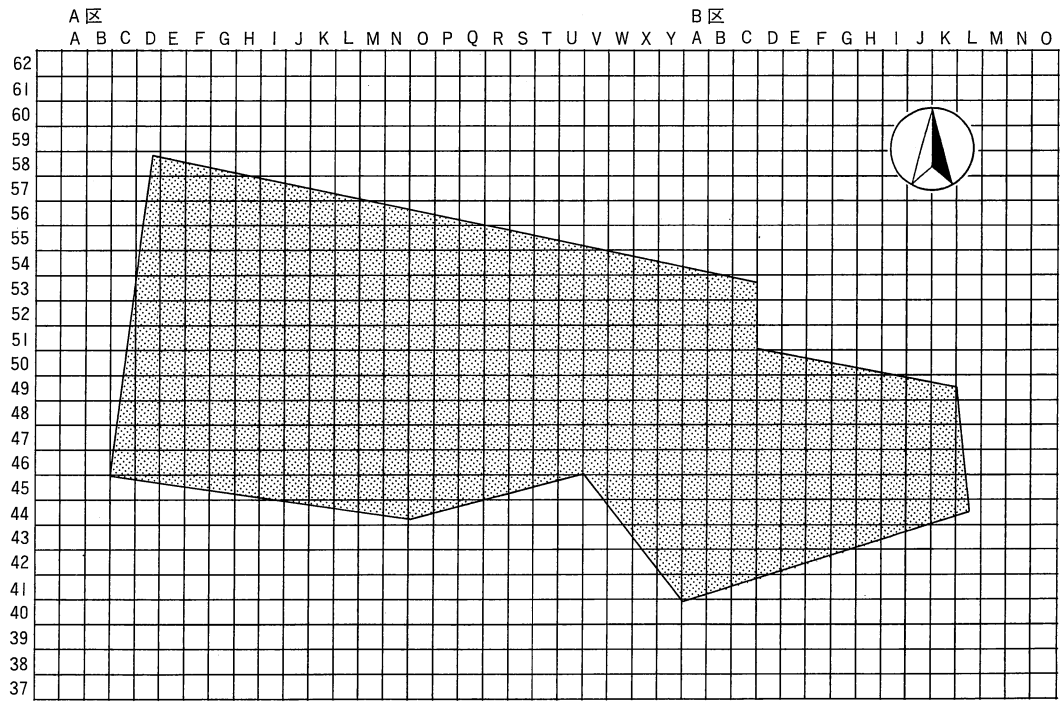
第 3 図　土井平遺跡発掘調査区域図・地形図（1：2,500）

III 調 査 方 法

1 調査区の設定と調査方法

基盤工事から緊急発掘調査に変更となったため、表土と礫含黒色土層はすでに重機で取り除かれた状態であり、また、工事が行われていなかった個所については、重機で表土剝ぎを行い。遺構検出に先だち第4図に示したとおり、東西南北（磁北）に軸を合わせたグリッドを設定した。東西方向には50mの大地区を設け、西からA区・B区というようにアルファベットを用いて地区割りをした。大地区の中をさらに2×2mの小地区（グリッド）に分割し、東西方向は西からA～Yのごとく区分した。南北方向には算用数字をふったが、遺跡の中心と思われるラインを50とし、そのラインを基準に南方向は49・48・47というように南にいくにしたがい小さくなるように、北方向は51・52・53と大きくなるように振分けた。

個々のグリッドの呼びかたは、たとえば第4図の調査範囲を示したグリッド配置図の左上方のグリッドでみると、大地区はA区である。小地区の東西方向はDラインにあたり、南北方向が58ラインで、それは「D－58」となる。したがって小地区の前に大地区を表記した「AD－58」となる。



第4図　土井平遺跡グリッド配置図

発掘調査の対象は第3図に示した範囲で、平成4年度県営圃場整備事業恩前地区にかかる遺跡の全域におよんだ。

発掘調査は、原則として礫含ソフトローム層の上面まで層位別に行なったが、平安時代の竪穴住居址が礫含褐色土層中に構築されていたこともあり、礫含褐色土層の上半部で遺構の検出作業を行った個所も多かった。また、保存状態が極めて悪かったこともあり、遺構を検出するにあたって、平面観察だけでは小竪穴であるのか、それとも後世の攪乱穴であるのかを、判別することは一切できない状態であったため、第III層の礫含褐色土層と第IV層の礫含ソフトローム層に掘り込まれた「穴」全てを小竪穴と考え、精査を進めるなかで新しい遺物を発見した「穴」を遺構から除外する方法も採った。遺物は、基本的にグリッド別・層位別にとり上げ、遺構に伴うものは遺構別に取り上げた。

遺跡の範囲が不明確なまま進めた調査であったが、埋蔵されていた遺構の全て調査できたものと思っている。

測量は、予め設定した2m四方のグリッドを基準とするやり方方式による。

2　土　　層

土井平遺跡の発掘調査は、第4図のグリッド配置図に示したように 409グリッド 1,424㎡の平面発掘を実施したが、層序は極めて不安定であった。

それは、小高い尾根上から緩やかな南斜面に遺跡が立地していたことから、土の流失が著しかったことと、肥料を散布するさいに繰り返し掘られた穴や溝による攪乱が著しかったためである。しっかりした層序が認められた所は無いに等しい状態であった。

遺跡（果樹園）を外れた水田部分の層序を参考にするなかで、本遺跡の層序をみていくと、基本的には、上層から耕作土である礫含黒褐色土（表土）→旧い耕作土である礫含黒色土→礫含褐色土→礫含ソフトロームとなり、旧い耕作土を取り除けば遺構が検出ができる状態であった。

おおまかな観察結果を記しておきたい。

第Ⅰ層　礫含黒褐色土層　　表土層・畑の耕作土で15～20cmの厚さである。

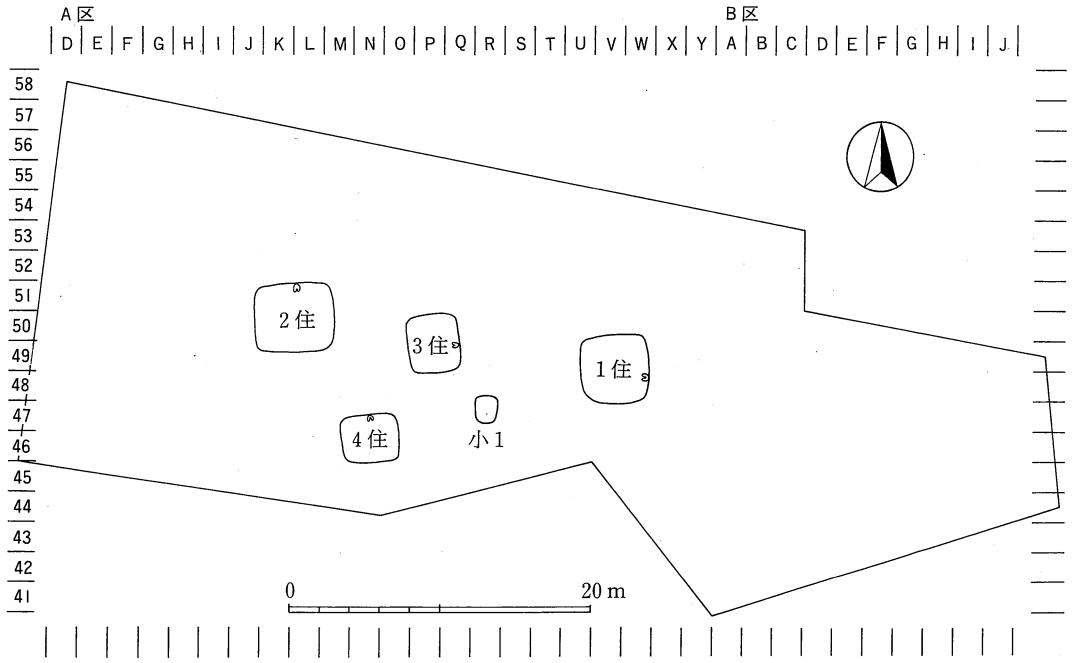
第II層　礫含黒色土層　　旧い耕作土で、第Ⅰ層よりしまっている。礫の包含量も多くなる。隣接する水田の土層を参考にして便宜的に礫含黒色土層と呼んだが、場所によってその色調に違いがみられる。中には隣どうしのグリッドで違いがみられた。それは肥料散布のために繰り返し掘られた攪乱層であるため、その穴が第III層までか、それとも第IV層まで掘られたかの違いと、その回数による違いによるものである。

第III層　礫含褐色土層　　平安時代の住居址が構築された層である。第II層よりしまっている。礫は大きくなる上にその量も増す。やはり肥料散布で繰り返し掘られた攪乱範囲が広く、この層が認められた所の方が少ない。

表2　土井平遺跡遺構一覧

カッコ付けの数値は推定を示す

遺　構　名	時　代	遺構の規模・特徴等	出土遺物等
第1号住居址	平安時代	隅丸方形竪穴住居址　東西（460 cm　南北 478 cm　柱穴4本(位置にやや問題がのこる)　竈は東壁破損著しい鍛治遺構？	土師器　須恵器　灰釉陶器　鉄滓
第2号住居址	平安時代	隅丸方形竪穴住居址？　東西（530）cm　南北（460)cm　柱穴なし　竈は北壁破損著しい　P3は小竪穴？	土師器　須恵器　灰釉陶器
第3号住居址	平安時代	隅丸方形竪穴住居址？　東西（340）cm　南北（400）cm　柱穴なし　竈は東壁破損著しい	遺物の発見は皆無
第4号住居址	平安時代	隅丸方形竪穴住居址？　東西（390）cm　南北（330）cm　柱穴なし　竈は北壁破損著しい	土師器　灰釉陶器　墨書土器
小　竪　穴　1	時代不詳	不整隅丸方形　東西 158 cm　南北 200 cm	遺物の発見は皆無



第5図　土井平遺跡遺構配置図

第IV層　礫含ソフトローム層　　やはり肥料散布のために掘られた穴や溝が数多くみられる。

3　調査の概要

本遺跡は「発掘調査に至る経過」でも述べたように、周知されていた遺跡ではなく、工事中に須恵器の大甕を偶然発見し緊急発掘調査を実施した。

事前に遺跡の範囲を明確にできないままに調査を進めたし、また、準備もできなかったこともあり、破壊されていく遺跡であるにもかかわらず、その調査はあまり良いものではなかった。

また、「1　土層」でも述べたが、本遺跡における攪乱は極めて著しいものがあり、肥料散布に掘られた穴や溝は、遺構を検出した時点の平面観察では、平安時代に帰属する遺構であるのか、それとも新しい穴や溝であるか判別することは一切できない状態であったため、それら全てを平安時代の遺構と考え精査を進める中で、新しい遺物が伴出した穴や溝は肥料散布のために掘られたものと考え、遺構から除外する方法を採った。

調査の結果、平安時代後期の住居址4軒と時代不詳の小竪穴1基を検出調査した。その分布状況は第5図に示した通りである。

発見した遺構は次の通りである。

平安時代

後期竪穴住居址　　4軒

時代不詳

小竪穴　　1基

IV 遺構と遺物

1 平安時代の遺構と遺物

(1) 住 居 址

第1号住居址 （第6・7図、写真2・3）

遺跡の東端に辺るＡＵ－48～50、ＡＶ－47～50、ＡＷ－47～50の11グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址で、西側は耕作で生じたと思われる穴によって破壊されている個所もある（第6図、写真2・3）。

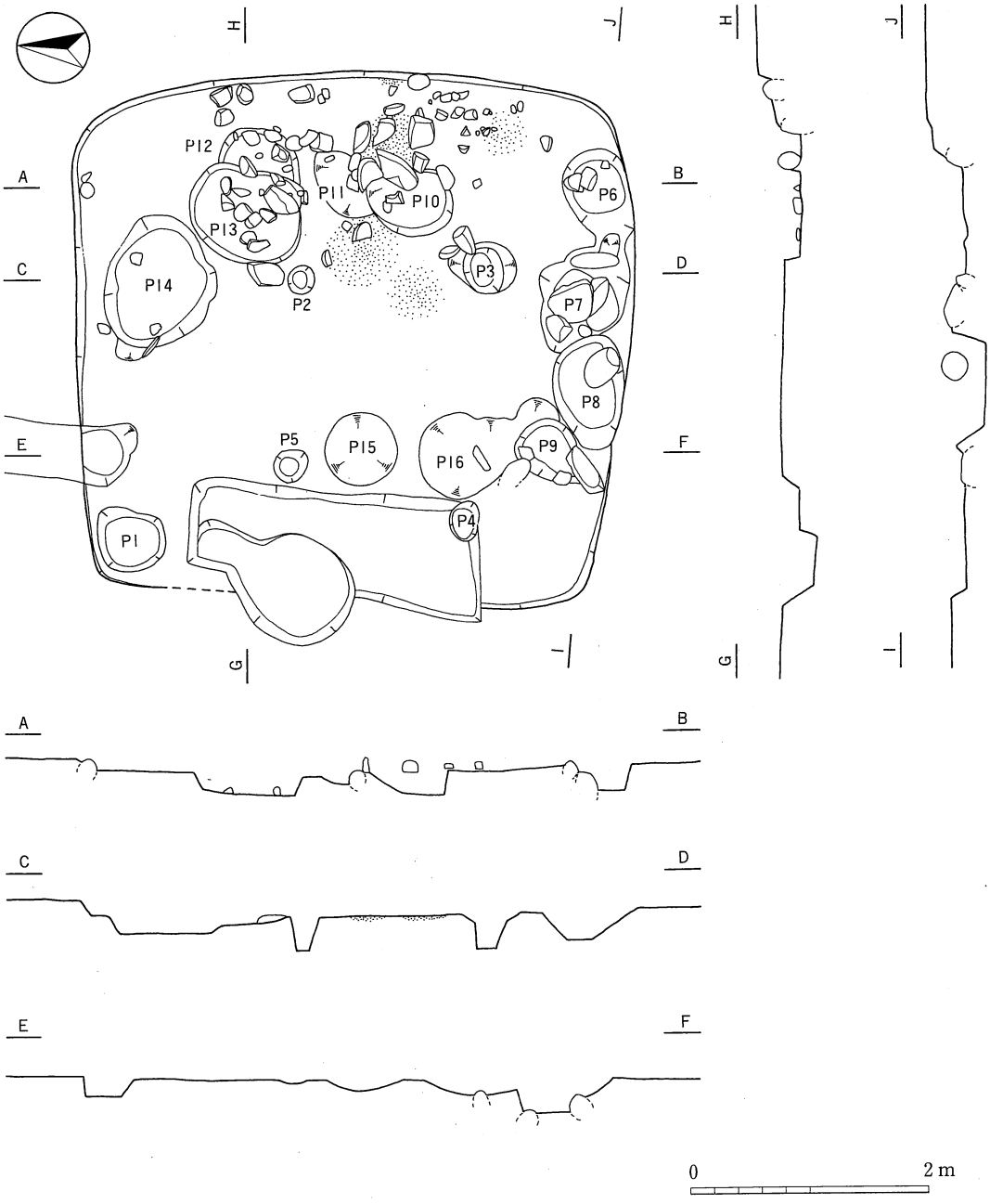
土層観察ベルトを東西方向に設定し精査を行った結果、埋土は薄く明確ではなかったが、逆三角堆土と三角堆土の発達が認めらる自然埋没と考えられるものであった。

竪穴住居址は、礫含ソフトローム層中に構築されていたものであり、その大きさは東西（460）cm、南北 478cmを計る。壁の状態は、ほぼ垂直に立ち上がり普通であるが、南壁の立ち上がりはなだらかな上に不明瞭な所もあり良くない。壁高は東が13cm、西は3cm、南は6cm、北は11.5cmと低い。床面はほぼ平らであるがやや西側に傾き傾向にある。部分的にタタキ床も認められはしたが、総体的には軟弱であまり良くない。主柱穴と思われるＰ2～Ｐ5の4本はしっかりしたものである。大きさをみるとＰ2の平面形は24×24cmの円形で深さは29cm。Ｐ3は41×33cmの楕円形で深さは30cmを計るが、穴の縁が崩れた状態である。Ｐ4は34×24cmの楕円形で深さは30cm。Ｐ5は29×27cmの円形で深さは30cmであり、深さは29cmと30cmで一定している。しかし、柱穴間を結んだ規模はあまりにも小規模なものとなり、竪穴の規模に比べるとやや小さすぎる上に、壁からも離れすぎている。上屋の構造は一体どのようになっていたのであろうか。一考を要するが今後の研究にゆずりたい。Ｐ1は65×60cmの不整円形で深さは31cmを計り、土師器の坏の完形品と鉄滓が出土している。東壁の直下には壁際にそってＰ6～Ｐ9が並ぶがその性格は不明である。大きさはＰ6が86×53cmの楕円形で深さ21cm。Ｐ7は（107）×78cmの楕円形で深さ21cm。

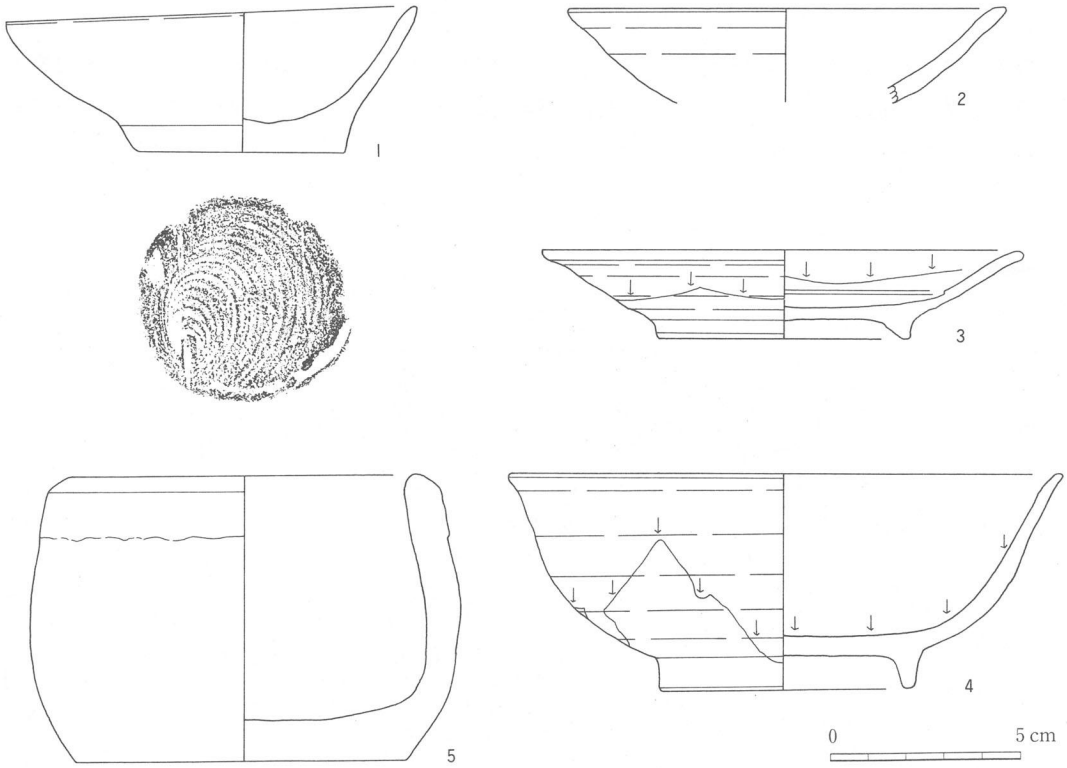
Ｐ8は97×60cmの楕円形で深さ36cm。Ｐ9は64×50cmの楕円形で深さ26cmをそれぞれ計る。Ｐ10とＰ11はその検出位置からみて竈に関係あるものであろう。大きさはＰ10が（65）×64cmの円形で深さ15cm。Ｐ11は（75）×40cmの楕円形で深さ9cmと浅い。Ｐ12とＰ13は重複しているが新旧関係は不明である。Ｐ12は69×（38）cmの楕円形で深さ22cm。Ｐ13は 103×82cmの楕円形で深さ23cm。Ｐ14は 114×95cmの楕円形で深さ13cmで、性格は不明である。また、Ｐ15とＰ16は、底の

丸い浅い穴であり後世の攪乱穴と思われるが、明確にできなかった。

竈は、東壁に石組粘土竈が構築されていたものと思われるが、その破損は著しく、火床の焼土と僅かな粘土が遺存しただけで、近くに石組の礫が散乱していた。焼土の厚さは11cmでその下も火熱による変色がみられた。



第6図　土井平遺跡第1号住居址実測図（1：60）



第7図　土井平遺跡第1号住居址出土土器実測図（1～5　1：2，6　1：3）

前記したように鉄滓がピット内から出土しているが、確実に本址に伴うものであり、また、竈とは違うしっかりした焼土（火床）を2個所で発見していることからみて、本址に小鍛冶跡が伴っていたことは容易に考えられる。なお、焼土の厚さは6cmと10cmを計り、その下も火熱による変色がみられる。諏訪地方における小鍛冶跡が伴う住居址に目を向けてみると、それらには数多いピットが伴っている傾向は強いようである。本址でも性格の判らないピットを数多く発見しているが、その点からも小鍛冶跡の存在を考えることができよう。

発見した遺物は、土器と鉄滓がある。当地方の該当期の資料としてはやや少ないようである。土器は土師器・須恵器・灰釉陶器があり、供膳形態は、土師器の坏（第7図1・2）と鉢（5）で、胎土・整形・焼成とも普通である。（1）は前記したようにP1から出土した完形品で、底部に糸切り痕が残っていることからロクロ整形されたものであるが、その整形は極めて悪く歪みが著しい。（2）は小破片から器形を復原した。この他に図示できなかった小破片があり、下半部に「ヘラ削り」の施されたいわゆる甲斐型坏もある。（5）は5分の1くらいの破片から器形を復原したが、整形は悪く特に口唇部は良くない。灰釉陶器の段皿（3）と碗（4）があり、口縁部をわずかに欠損している。折戸53号窯期のものである。この他に図示できなかった小破片もある。

煮沸形態は、土師器の甕（6）があり、約半分くらいが残存するだけで、わずかに残る底部は木葉底である。胎土と焼成は普通であるが、整形は悪く歪みが著しい。この他に図示できなかった4ないしは5個体の破片がある。

貯蔵形態は、小破片で図示できなかったが、須恵器では甕の口縁部破片、灰釉陶器の瓶ないしは壺の胴部破片がある。

第2号住居址　（第8・9図、写真4～6）

遺跡の西端に辺るAJ－49～51、AK－49～51、AL－49～51、AM－49～51の12グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われるが、東壁と北壁を僅かに確認しただけであり、明確なことはわかっていない（第8図、写真4）。

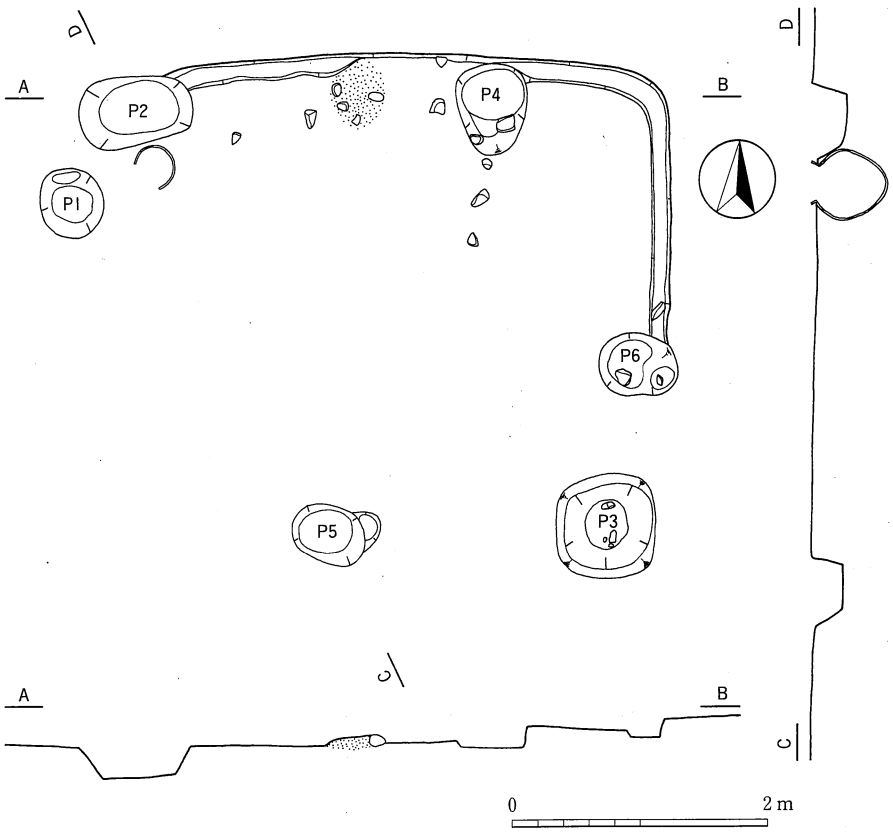
竪穴住居址は、礫含褐色土中に構築されていたものであり、その大きさは残存する東壁と北壁から推測すると、東西（530）cm、南北（460）cm位であろう。壁は、ほぼ垂直に立ち上がるがあまり良い状態ではない。壁高は、東・北とも5cmと低い。床面は褐色土中であり南側では検出できなかった。残存部はほぼ平らで部分的にタタキ床も認められはするが、総体的には軟弱で良くない。P1～P6のピットを発見しているが、柱穴と思われるものはない。P1の形態は柱穴状のもので56×50cmの円形で深さ33cm。P2は91×55cmの楕円形で深さ23cm。P3は83×80cmの丸みを持つ隅丸方形で、壁は2段に立ち上がり深さ46cmを計り、底には礫が入っている。P4は重複しているようにみえるもので、72×57cmの楕円形で深さは底面の広い所で27cm、狭い所は19cmを計り、底には礫が入り粘土で埋まっていた。P5は小さなピットと重複しているようにみえる

もので、61×46cmの楕円形で深さは25cm、小さい方は30×14cmで深さは８cm。Ｐ６は重複しているようにみえるもので、65×51cmの楕円形で深さは底面の広い所で17cm、狭い所は15cmを計り、底には礫が入っている。周溝が東と北壁直下にみられ、その深さは東壁直下のものが６～７cm、北壁直下ものは５～８cmである。住居内にみられた礫は床面ないしは床面直上からの発見である。　北西隅にあたるＰ２の南に、遺跡発見の動機となった須恵器の大甕が埋設されていた。それは正位で埋められていたが、レベルをみると頸部は床面より上に出ていたものと思われる。発見したとき、すでに破損していたこともあり確実なことはいえないが、割れた面を観察すると全て真新しいものばかりで、重機が頸部に当ったことにより破損したようである。大甕内に充満していた土は黒色土で、竪穴の埋土と同質のものであり、住居廃絶後に流れ込んだものと思われる。

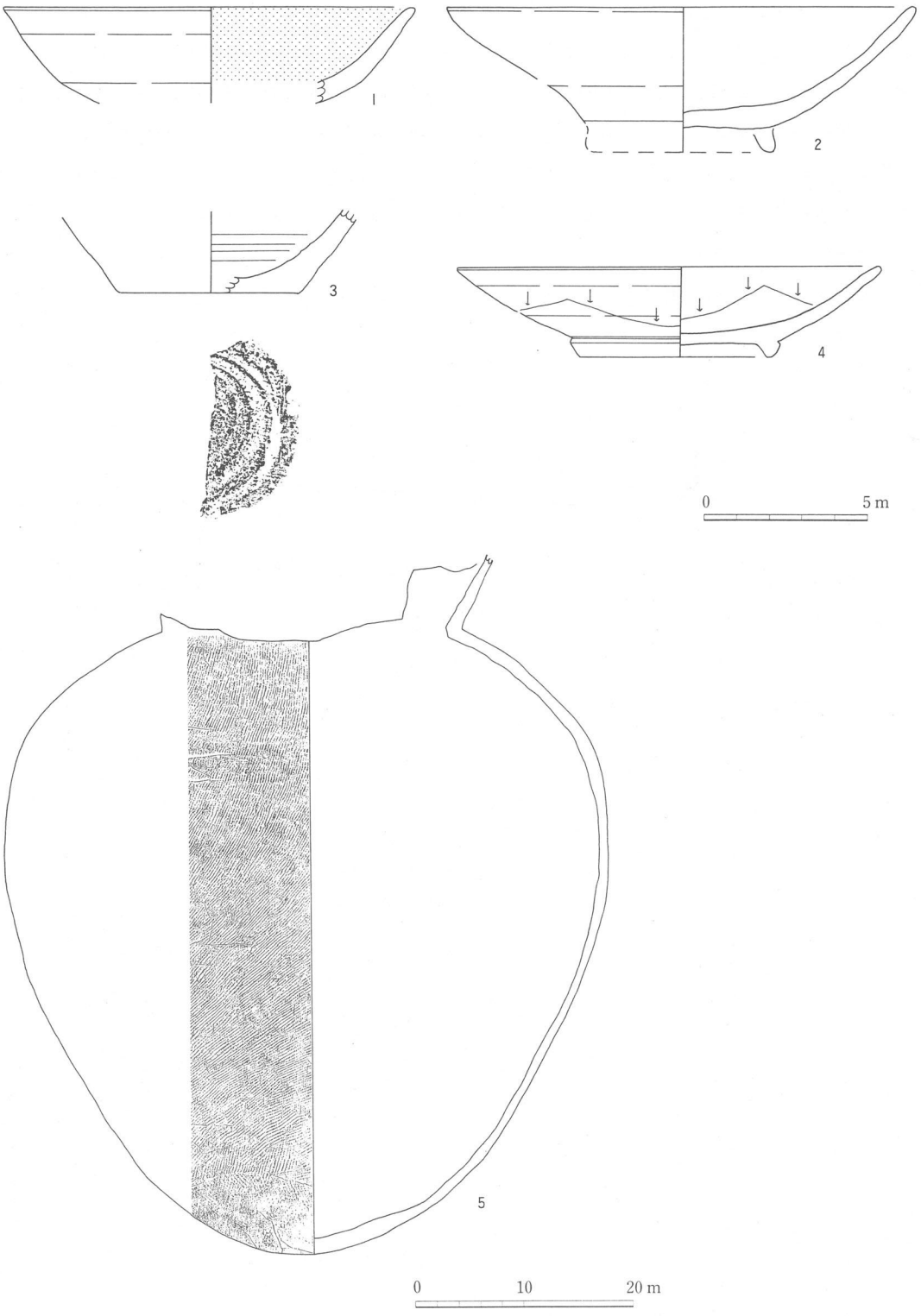
竈は北壁のほぼ中央に、石組粘土竈が構築されていたものと思われるが、その破損は著しく火床の焼土、僅かな粘土と小礫を発見しただけである。焼土の厚さは７cmでその下も火熱による変色がみられた。

発見した遺物は土器だけで、当地方の該当期の資料としては少ない。遺構の説明でもわかるように埋土が薄かったこともあり、床面・床面直上ないしはピット内からの出土である。

土器は土師器・須恵器・灰釉陶器があり、供膳形態は、土師器の坏（第９図１・２）があり、



第８図　土井平遺跡第２号住居址実測図（1：60）

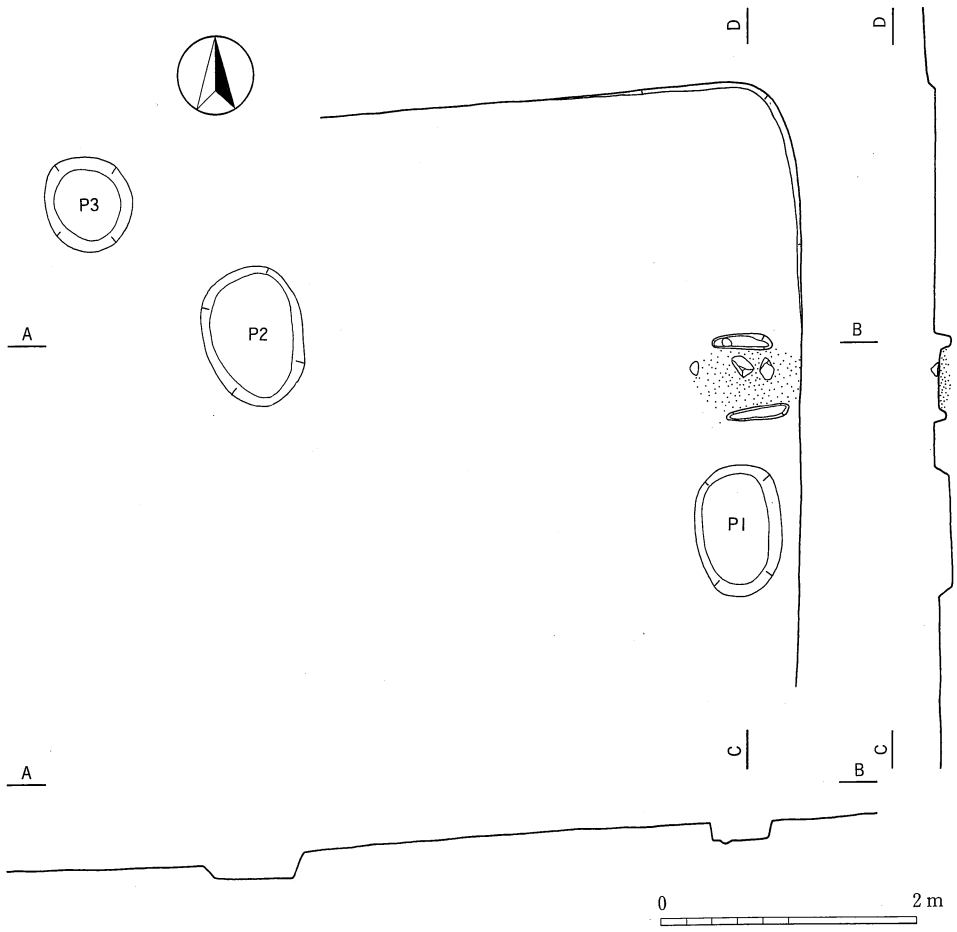


第 9 図　土井平遺跡第 2 号住居址出土土器実測図（1～4　1：2，5　1：6）

胎土・整形・焼成とも普通である。（1）は小破片から器形を復原した内面黒色研磨土器で、P3からの出土である。（2）は高台が剝落している坏で3分の1くらいが残存する。P1とP5から出土した破片が接合した。灰釉陶器の皿（4）があり、口縁部をわずかに欠損している。折戸53号窯期のものである。この他に土師器・灰釉陶器とも図示できなかった小破片がある。

煮沸形態は、土師器の小型甕（3）があり、小破片から器形を復原したもので、胎土・整形・焼成とも普通で、P1からの出土である。この他に図示できなかったが、器面に刷毛目調整が施された甕の小破片がある。

貯蔵形態は、須恵器の甕（5）がある。前記したように床面に埋設されていたいたもので、器外面には叩き目がみられる。



第10図　土井平遺跡第3号住居址実測図（1：60）

第３号住居址　（第10図、写真７）

１号と２号住居址のほぼ中間に位置するＡＯ－49・50、ＡＰ－48～50、ＡＱ－48～50の８グリッドに跨る隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われるが、東壁と北壁を僅かに確認しただけであり、明確なことはわかっていない（第10図、写真７）。

竪穴住居址は、礫含褐色土中に構築されていたものであり、その大きさは残存する東壁と北壁から推測すると、東西（340）cm、南北（400）cm位であろう。壁はほぼ垂直に立ち上がるがあまり良い状態ではない。壁高は、東・北とも５cmと低い、一番高い北東隅でも10cmを計るだけである。床面は褐色土中であり南側では検出できなかった。残存部はほぼ平らで部分的にタタキ床も認められはするが、総体的には軟弱で良くない。Ｐ１～Ｐ３のピットを発見しているが、柱穴と思われるものはない。Ｐ１は 105×70cmの楕円形で深さ13cmと浅いが、その位置関係からみて灰だめの穴と考えられる。Ｐ２は 114×81cmの楕円形で深さ20cm。Ｐ３は76×70cmの楕円形で深さ10.5cmを計るが、住居の外と思われる位置にある。便宜的にここで報告するが、住居址に伴わないものであれば小竪穴となる。しかし、遺物を発見していないことから帰属時期は不明である。

竈は、火床の焼土と僅かな粘土の発見位置からみて、東壁のほぼ中央に石組粘土竈が構築されていたものと思われるが、破損は著しくすでに袖石は抜き取られていた。なお、焼土の両脇で、袖石を埋設した長楕円形の穴を確認している。その穴の大きさは、右側のものが50×11cmで深さ9.5cm。左側のものは48×12cmで深さ9.5cmをそれぞれ計る。焼土の厚さは10cmでその下も火熱による変色がみられた。

残存する壁の高さでもわかるように、埋土が極めて薄かったこともあり、遺物の発見は皆無である。

さて、遺物の発見がないことから明確な帰属時期を示すことはできないが、残存する東壁と北壁からプランを推測すると隅丸方形で、破損状態は著しかったが石組粘土竈が東壁に構築されていた。これは、当地方における平安時代後期の住居形態である。また、第５図の遺構配置図に示したように、その位置関係からみても一切の不自然なこともなく、本址は第１・２・４号住居址と同じ平安時代後期の住居址と考えてもさしつかいないようである。

第４号住居址　（第11・12図、写真８）

２号・３号住居址の南に位置し、遺跡南端に辺るＡＭ－45～47、ＡＮ－45～47、ＡＯ－45～47の９グリッドに跨る不整隅丸方形を呈する竪穴住居址と思われるが、東壁と北壁の一部を確認しただけであり、明確なことはわかっていない（第11図、写真８）。

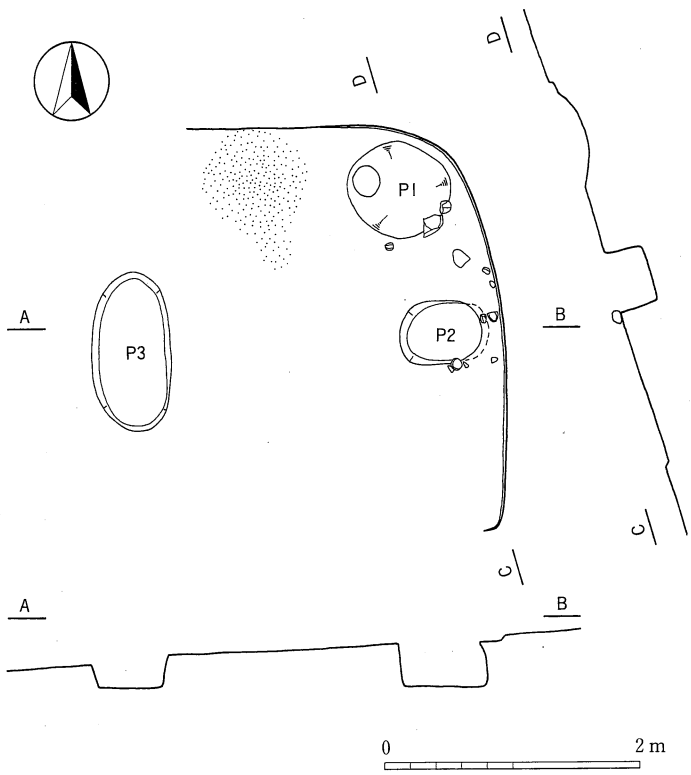
竪穴住居址は、礫含褐色土中に構築されていたものであり、その大きさは残存する東壁と北壁から推測すると、東西（390）cm、南北（330）cm位であろう。残存する壁はほぼ垂直に立ち上がりるがその状態はあまり良くない。壁高は、東が 5cm、北は 3cmと低い。床面は褐色土中であり南側では検出できなかった。残存部はほぼ平らで部分的にタタキ床も認められはするが、総体的

には軟弱で良くない。Ｐ１～Ｐ３のピットを発見しているが、柱穴と思われるものはない。Ｐ１は83×79cmの楕円形で深さは14cmと浅いが、その位置関係からみて灰だめの穴と考えられる。Ｐ２は65×51cmの楕円形で深さ36cmを計り、東側は袋状となり底面が広くなる。Ｐ３は 127×62cmの楕円形で深さ26cmである。

竈は、東壁のほぼ中央に石組粘土竈が構築されていたものと思われるが、その破損は著しく、火床の焼土と僅かな粘土が遺存しただけである。焼土の厚さは14cmを計ったが、しっかりしていたのは６cmである。

発見した遺物は土器だけで、当地方の該当期の資料としてはやや少ない。遺構の説明でもわかるように埋土が薄かったこともあり、土器は床面・床面直上ないしはピット内からの出土である。

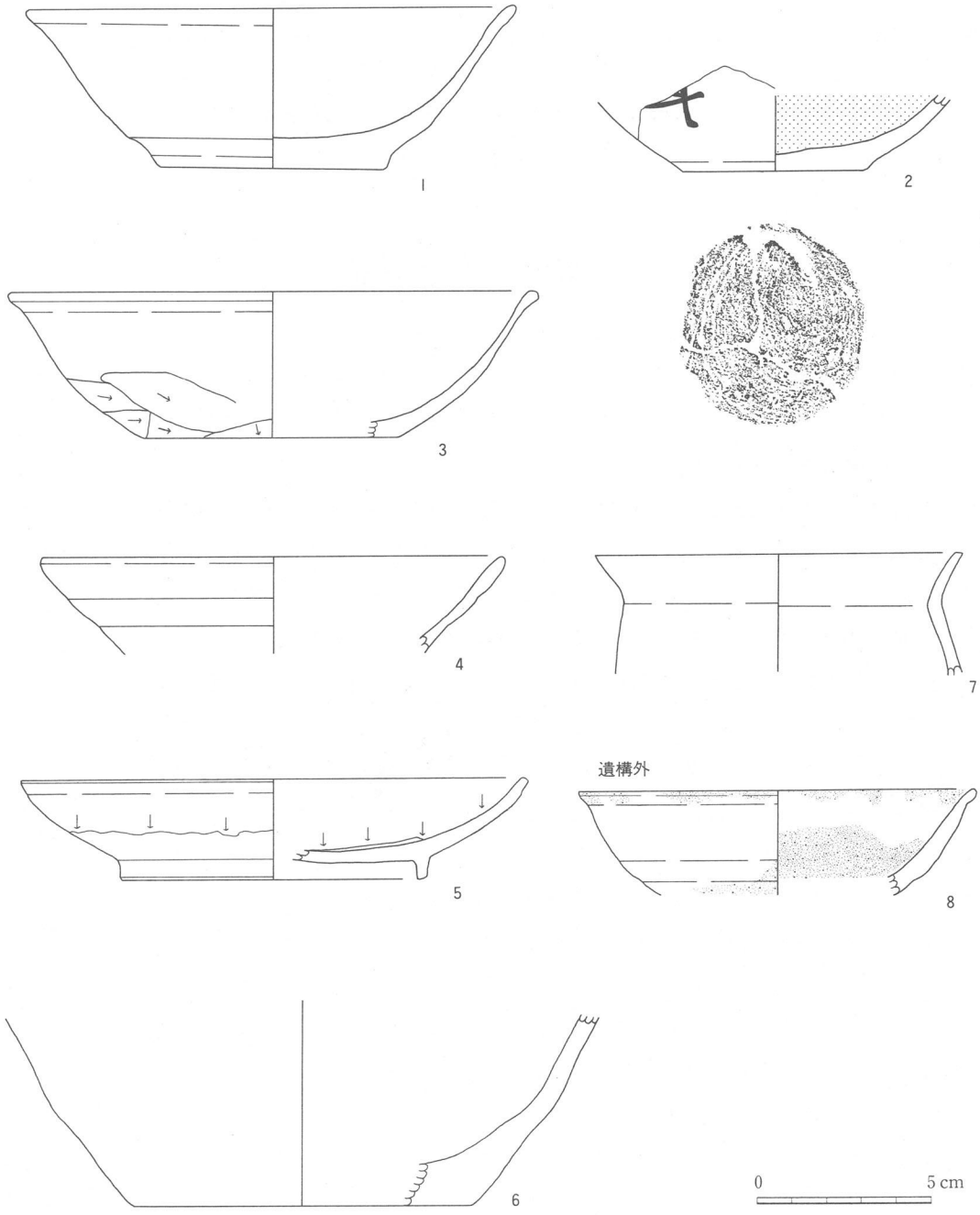
土器は土師器と灰釉陶器があり、供膳形態は、土師器の坏（第12図１～４）があり、４点全てがＰ１からの出土である。（１・２・４）は胎土・整形・焼成とも普通で、（１）は４分の３くらいが残存する。（２・４）は小破片から器形を復原した。（２）は内面黒色研磨の施されたもので、底部に糸切り痕が残り、外面に墨書がみられる。しかし、文字の一部が残存しているだけであり判読はできない。（３）も破片から器形を復原したが、明赤褐色の緻密な胎土を有し焼成は良い、外面の下半部および底部に「ヘラ削り」の手法が施さたいわゆる甲斐型坏である。灰釉



第11図　土井平遺跡第４号住居址実測図（1：60）

陶器の皿（５）があり、小破片から器形を復原した。折戸53号窯期のものである。この他に土師器・灰釉陶器とも図示できなかった小破片がある。

煮沸形態は、土師器の甕（６）と小型甕（７）がある。やはり小破片から器形を復原したが、胎土・整形および焼成とも普通である。



第12図　土井平遺跡第４号住居址・遺構外出土土器実測図（1：2）

(2) 遺構に伴わない遺物 (第12図)

遺構に伴わない資料は、土師器と灰釉陶器の破片がある。

土師器は供膳形態の坏ばかりで、(第12図8)は破片から器形を復原した。肉眼観察によると黒茶色の漆と思われるものが、口唇部と内面に付着している。付着状況は実測図にスクリーントーンで示した。

灰釉陶器は小破片ばかりで器形を復原できるものはないが、供膳形態の碗であろう。中には高台部分もみられる。

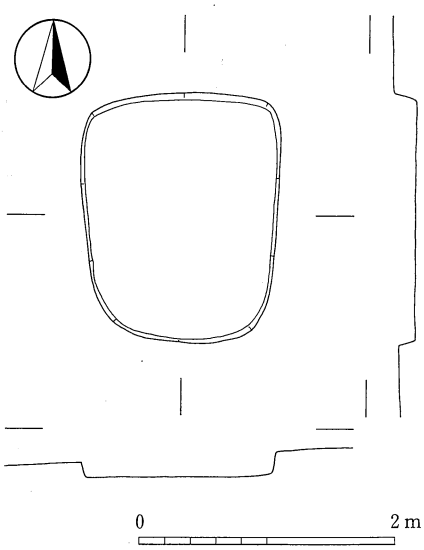
2 時代不詳の遺構

(1) 小竪穴

小竪穴1 (第13図)

1号住居址と4号住居址のほぼ中間にあたるAR—47・48グリッドで検出調査した。小竪穴は礫含褐色土中に構築されていたもので、平面形は隅丸方形、大きさは東西158cm、南北200cmを計る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は9～17cmを計るが南壁が低く北壁が高い。底面はほぼ平らで南側に僅かかではあるが傾いている。この傾きは地形の傾斜方向と同じである。

発見した遺物は皆無で、帰属時期は不明である。なお、調査地区は普通畑であったが、以前はりんごを生産していた果樹園であり、肥料を散布するための穴ないしは溝が繰返し掘られたようで、その攪乱が著しかった上に、工事中に遺跡を発見したと云うように、極めて悪い条件が重なりすぎたようである。したがって、土層は不安定極まりないもので遺構検出の折りに、肥料を散布した穴を小竪穴と認定し精査を進めるという不手際が生じた。調査の結果、確実に肥料を散布した穴と認められたものは小竪穴から外したが、本小竪穴は、肥料を散布した穴と確信できなかったことから遺構と認定したが、遺物の発見は皆無であり、性格についても不明である。



第13図 土井平遺跡小竪穴1実測図 (1:60)

V　ま　と　め

周知の遺跡でなかったこともあり、圃場整備事業の基盤工事を一時中断するなかで、緊急発掘調査を実施した結果、平安時代の竪穴住居址4軒と時期不詳の小竪穴1基を発見調査した。

土井平遺跡の立地は、当地方における平安時代の典型的な遺跡立地とは若干違っていたが、4軒の住居址を発見したことにより、遺跡立地のありかたに新たな知見を投げかける調査であった。

今までは、このような地形を平安時代の遺跡として注意したことはなく、本遺跡の発見に接したことにより、すでに開発されてしまった地域の中で、あそこは平安時代の遺跡が、そうだあそこにも平安時代の遺跡が埋没していたのではないだろうか、と考えさせられる所は多い。大規模開発に伴って行う埋蔵文化財の保護の難しさを改めて考えさせられた。

ふいごの羽口など決め手となる資料の発見こそなかったが、1号住居址は、鉄滓の発見および遺構のあり方からみると小鍛冶跡が伴っていたようである。また、いつもいつも書いていることであるが、住居址以外の施設の発見はなく、平安時代の人たちは、貯蔵穴などは必要としていなかったか疑問の残る調査であった。いずれにしろ当地方における一般的な集落跡である上に、遺構の重複のなかった単純集落であることは、集落研究の好資料となろう。

最後に、関係者各位ならびに調査にたずさわった方々に厚く御礼申し上げる次第である。

引用参考文献

1985 07　原村役場『原村誌　上巻』

1992 11　原村教育委員会『原村の埋蔵文化財小報7　平成4年度県営ほ場整備事業恩前地区内の踏査報告書　裏長峰・程久保・恩膳南・恩膳西遺跡』

1993 03　原村教育委員会『原村の埋蔵文化財小報8　平成4年度県営ほ場整備事業恩前地区内の発掘調査終了報告書　裏長峰・上居沢尾根・程久保・土井平遺跡』

写　真　図　版

写真１　発　掘　風　景（西から）

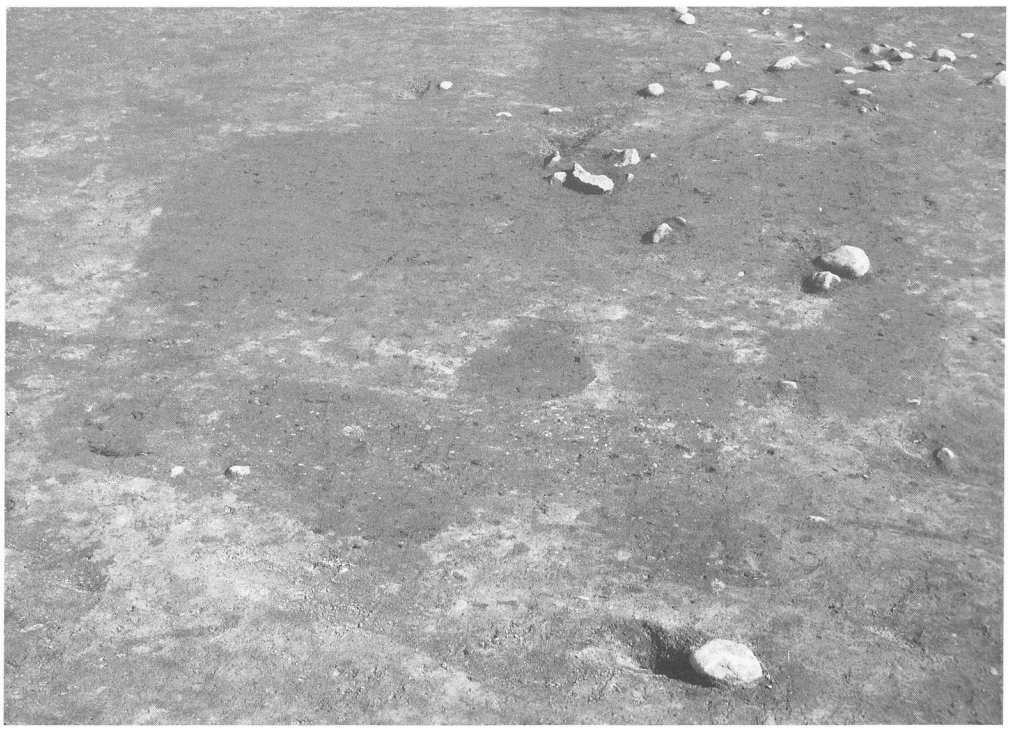


写真２　１号住居址検出状態（西から）

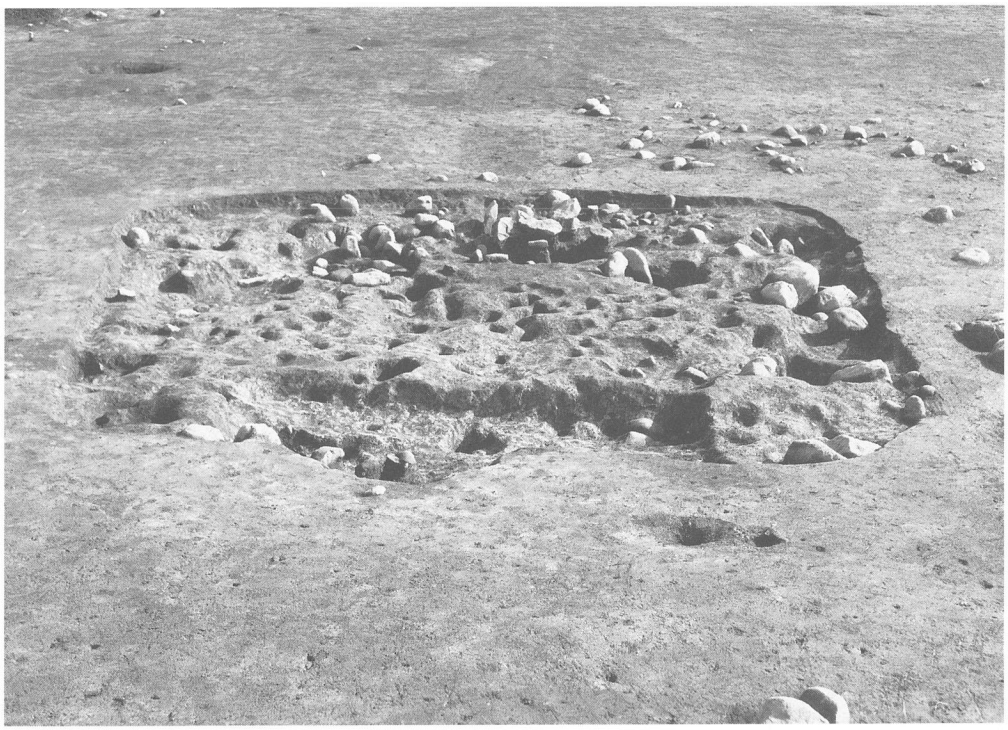


写真3　1号住居址（西から）

写真4　2号住居址（西から）

写真５　２号住居址大甕出土状態（南から）

写真６　２号住居址大甕埋土土層（南から）

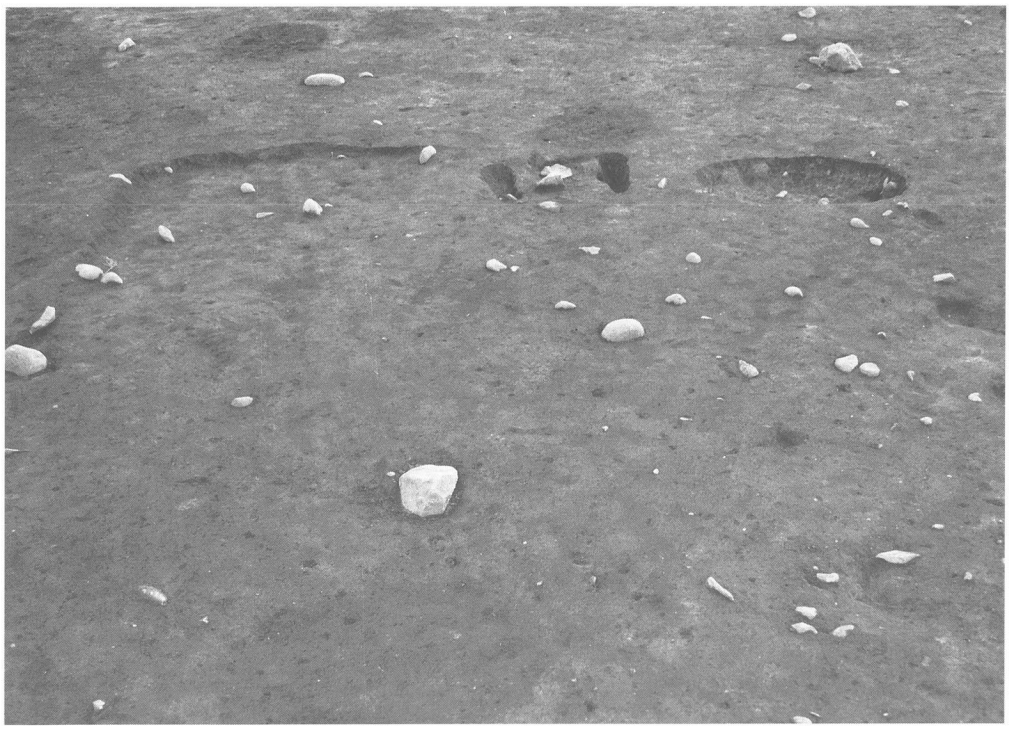


写真7　3 号 住 居 址（西から）

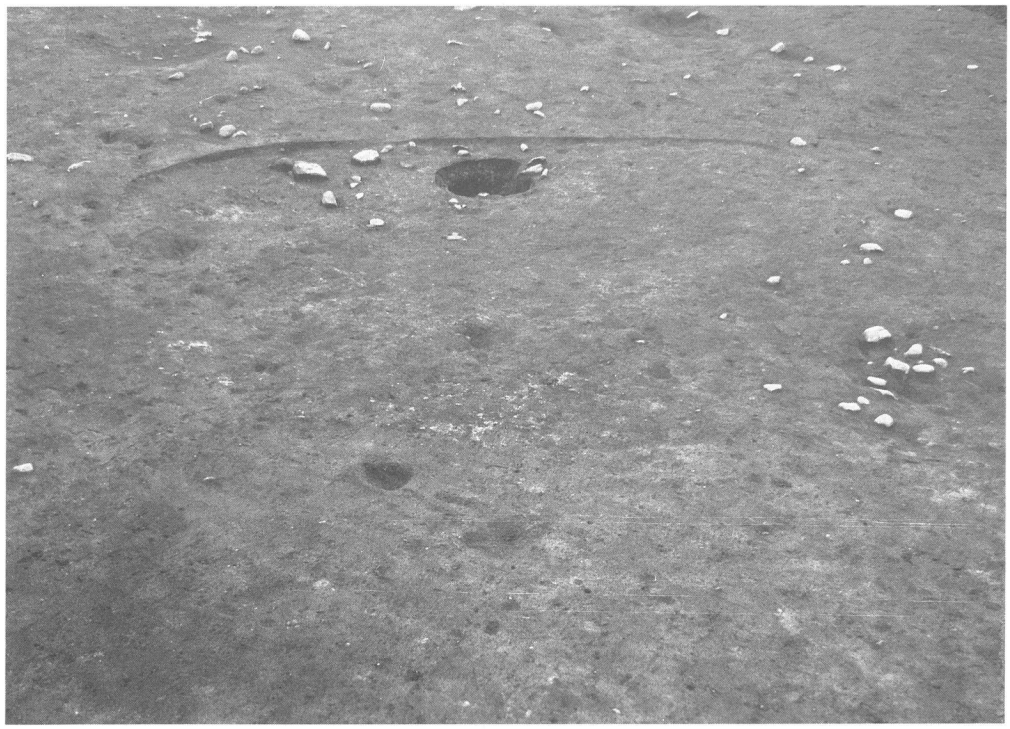


写真8　4 号 住 居 址（西から）

報告書抄録

ふりがな	どいでえらいせき
書名	土井平遺跡
副書名	平成4年度県営圃場整備事業恩前地区に先立つ緊急発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	原村の埋蔵文化財
シリーズ番号	31
編著者名	平出一治　平林とし美
編集機関	原村教育委員会
所在地	〒391-01　長野県諏訪郡原村6549番地1　　TEL　0266-79-2111
発行年月日	西暦　1995年03月

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m²	調査原因
土井平（どいでえら）	長野県諏訪郡（ながのけんすわぐん）原村（はらむら）	3637	95	35度58分3秒	138度12分32秒	19921119～19921211	1,424	平成4年度県営圃場整備事業恩前地区

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
土井平	集落地	平安時代 後期 時期不詳	竪穴住居址　4軒 小竪穴　1基	土師器・須恵器・灰釉陶器・墨書土・器鉄滓	工事中に発見された新遺跡である。竪穴住居址4軒の小規模集落であったが、1号住居址には小鍛冶が伴う。 なお、当地方における平安時代の遺跡立地を考える上で、新知見を投げかけた。

原村の埋蔵文化財31

土　井　平　遺　跡

平成４年度県営圃場整備事業恩前地区に先立つ緊急発掘調査報告書

発行日　平成７年３月

発　行　原村教育委員会
長野県諏訪郡原村

印刷所　日本ハイコム株式会社
塩尻市北小野 4724
TEL 0263-56-2111

丸山
921.8
912.7
902.4
924.9
910.2
920.3
914.0
927.8
柏木
918.8
909.9
916.3
927.0
939.6
917.3
前沢橋
924.0
927.7
912.0
927.0
阿久川
919.8
阿久橋
928.0
925.8
945.6
東北自動車道路西ノ宮線
923.0
916.5
927.8